

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東 守

挿絵と文 池内文藏



第1話

水鳥の声で目覚めた。簾越しの空が燃えている。小屋から這い出ると、朝焼けの水面を切り裂くように進む舳先に小さな影がみえた。

「瀧覚どの、お目覚めでございますな」

声の主は、恩智左近だった。左近が舳先の孤影に「雉丸」と声を掛けると、影は反転して大きく頷き、足元から銅拍子を拾い上げ、並走する僚船の水主梶取らに朝を告げ始めた。

「この辺りを平潟(枚方)と申す」

菱烏帽子に直垂姿の左近が絵図を広げ、四隅を石で固定しながら現在地を指す。瀧覚たちを乗せた商船団は淀川を下り、平潟から旧河内湖の一部として残る深野池へと進む。

この父子が修験者に化けて瀧覚の棲む美濃の奥地を訪ねて来たのは二十日ほど前だった。

木戸越しに自らの素性を明かし、用向きを手短に述べた父子を庵に招じ入れると、父子の背後には数名の修験者姿の男たちが片膝をついていたが、殺気は感じられなかった。

左近の目配せで雉丸が短刀で着衣の袖を切り、中から油紙に包まれた密書のようなものを取り出し、瀧覚に差

し出した。雉丸と呼ばれる数えで十になるかならないかの少年は口が利けないらしいが、よく澄んだいい瞳をしていた。左近の「主」が瀧覚に宛てて書いたというその書状には、簡潔に要件のみが記されていた。瀧覚は一読後、窓外を流れる長良川に目を遣りながら、しばしもの想いに耽った。左近は即答をのぞまなかったが、瀧覚はひと言「こころえ申した」と返答した。

翌朝、左近が持参した修験者の装束に着替えた瀧覚は、左近らとともに長良川を下った。宿营地ごとに修験者姿が一人、また一人と姿を消し、美濃の不破を発った男は次の宿营地である近江の石部で再合流した。かれらは「主」に左近たちの「現在地」を伝令する「伊賀者」だった。栗田口から京の市街地に出る前の蹴上で、六波羅の役人の目を避ける為に菱烏帽子に括り袴の商人姿になった一党は、鴨川を下り、伏見の淀で待機していた仲間けあげの商船に乗り淀川を下った。

ほんの一睡の間に長い夢をみた。

夥しい数の火矢が降るなか、逃げ惑う幼い瀧覚と母がいた。火矢が瞬く間に屋敷を火の海にした。敵兵の薙刀に背中を突かれた母が断末魔の声とともに床板に伏すと、その血糊で足を滑らせた瀧覚に刃が迫った。

刹那、敵兵の背後で閃光が奔り、首が落ちた。首とともに「首と目を合わすな」という声が落ちて来た。声の主は瀧覚を担ぎ上げ、燃え盛る屋敷を後に闇に消えた。長い闇を抜けるとそこは長良川を見下ろす絶壁――何年かに一度みる同じ夢だった。

深野池では、半武装の兵数名を乗せた警備船が数艘接近し、瀧覚たちの船を護衛するように並走する。かれらは帝の大膳に川魚などを供する「大江御厨」を掌握する「水走党」の者たちで、南河内の壺井(現在の羽曳野市)から発生し、前九年の役・後三年の役でその名を知らしめた「河内源氏」の一の郎党として勢力を拡大し、淀川の水運で財を成している。

警備船の向こうから、ひと際大きな船がこちらに向かって来る。舳先に立つ立烏帽子姿の人影は生駒山から降り注ぐ朝日の中にあつて、その容貌は窺い知れなかったが、雉丸の横顔から白い歯がこぼれたのを見た瀧覚は、その影が自らをこの地に招いた人物である事を覚った。

瀧覚たちの船は恩智川と玉串川に挟まれた玉櫛荘の船着場手前で回頭し、棧橋に横付けする。警備船の者たちが一礼して彼らの基地へと帰ってゆくのを見送っている間に、舳先の人影は跳躍でもしたのか、出迎えに集まった者たちの先頭に立っていた。立烏帽子の男は、笑みを浮かべながら名乗った

――楠木右兵衛尉正遠でござる――